
焔の紋章

ゆず香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焔の紋章

【Nコード】

N4111J

【作者名】

ゆず香

【あらすじ】

火の国ファランドアは、王妃の誘惑に堕ちた国王の怠惰によって衰退していった。先代王妃の唯一の王子であるサツシュは、王家を飛び出し一人で旅をする中で一人の少女ルイズに出会う。少女の体には王家に古くから伝わる伝説の紋章があった。少女は衰退していく国を変えたいと本気で願い、その姿に王子も心を動かされる。

序章

火の国ファランドア

その国の仲むつまじい国王と王妃。

そこに一人の王子が生を受ける。

王子はサツシュと名づけられた。

5年後、ファランドア国境付近の貧しい集落に住む貧しい夫婦。

そこに一人の少女が生を受ける。

少女はルイーズと名づけられた。

サツシュが5歳になった頃、王妃が急逝した。

その頃からファランドアは衰退の一途をたどるのであった。

衰退の要因の一つには、亡き先代王妃の次に王妃となった、側室上
がりの女の存在がある。

サツシュとルイーズの出会いまではそこから10年ほど後になる。

序章（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

小説を書くのは全くの初心者ですので、まだまだ文章力など足りないかと思えます。

精一杯努力しますので応援よろしくお願いします。

第1章1、邂逅

頭上には真上にまで上がった太陽。そしてその光に暖められた土の香り。

ルイーズは畑に実った作物を収穫していた。

家の裏のほんの小さな区画には何種類かの作物が少しずつ実っている。

「ルイーズ！お昼にしましょう。」

「はい！ママ！」

燃えるような赤毛は土にまみれてくすんでいる。

透き通った宝石のようなその紅い瞳は、髪と同様に茶色くくすんだ顔に際立って輝いている。

ルイーズは10歳になった。

非常に貧しい家計状況ではあったが、家族3人で仲良く暮らしていた。

ルイーズがドタドタと家に入ると母親は、我が娘をじっと見つめて言った。

「ルイーズ、食事の前に裏で体を洗ってらっしゃい。ちょっと汚すぎるわよ。」

「あ、そう？じゃあちよつと行ってくるね！」

家の裏には小さな畑があり、そこをすぎると川と小規模な滝があった。

家族はそこで体を洗う。

身に着けていた洋服というにはちよつとボロボロな布着れを剥ぎ取り、川に飛び込む。

「ん〜っはあ！気持ちいいー！」
冷たい水で体を震わせながら清めていった。

サツシユは突然目の前に現れた赤毛の人物に驚いて、木の影に身を潜めた。

馬に水を飲ませながら旅の疲れを癒していたら、上流のほうに突然なにかが飛び出してきたのだった。

よく見るとそれは赤い毛の人物で、少年か少女かはわからなかったが、幼い子供のようなうだ。

この近辺に住んでいる者が、川で体を洗っているのだろう。

大して興味を惹く出来事ではなかったので静かにその場を離れようとした。

その時、その子供の背にちらりと小さなアザのような物が見えた。

もう一度よく見て、サツシユは自分の目を疑った。

「あれは・・・！！！」

薄茶色いものが竜の形になっている。

「まさか、伝説の・・・」

息を殺してそのアザをよく見ようと凝視していると、赤毛の人物がこちらを振り向いた。

「だれっ！！？」

「・・・あーっつと、旅の者だ！俺が水場で休憩していた所、オマエが飛び込んで来た。」

「覗いてたでしょ？」

サツシユはそのセリフで、その人物が少女だったのだと知った。

「いや、すまない。覗くつもりはなかったのだが。」

さっきのアザに興味湧いたので、もう少しこの少女について知り

たくなつた。

「この近辺に住んでいるのか？もし良ければ今晚の寢床を貸していただけないだろうか？」

少女はサツと水からあがるとすばやく布着れを身に付けた。

「旅の方なのね。うん、いいよ！家はこつち。来て来て！」

怪しい男と疑いもせず家に案内していいのか？と思つたが、ありがたく案内に従うことにした。

2、別れ

案内された先には小さな小屋が建っていた。

身なりからして貧しいのだろうとは思ったが、正直ここまでとは思わなかった。

家の中へ通されると、狭く薄暗い空間に小さな机があり、その上に多少の食事が乗せられている。

「ママーお客様だよ。旅の人なんだって。」

「あらあらまあまあ・・・こんな狭い家へようこそ！」

少女の母親は、少女と同じくボロボロの布を纏っていたが、明るい表情で歓迎の意を表した。

「サツシユと申します。もし宜しければ、今宵一晩だけ寢床を貸していただけませんか？」

「ええ、ええ、かまいませんよ。汚い家ですがどうぞごゆっくり。今お茶をお持ちしますね。」

大らかに笑うと母親は家の裏にある井戸へ向かった。

「旅人さん、サツシユって言うんだね。あたしはルリーズって言うの。よろしくね！」

ルリーズは母親と同じく明るい表情でサツシユに話し出した。

「サツシユの髪の毛、キレイな金色だねー。それに瞳は、青色だ！」
じつくりと顔を見つめると、彼はとても美しい顔立ちをしている。

サツシユは会う女性にはほぼ100パーセントうっとりで見惚れられる美麗な顔立ちをしている。

美しい金髪に澄んだ青い瞳、スラリと通った鼻筋、そして体軀は鍛え上げられ細身ながらも筋肉はしっかりと付いている。

しかしルリーズは異性を見る機会が全く無かったため、サツシユがどれほど美麗な部類なのかはわかっていない。

それでも彼の、光りを受けて輝く金髪や水晶玉のような瞳は美しいと思った。

「君は・・・」

サツシユが少しの間を置いて口を開く。

「君の髪は燃えるような赤い髪色だ。それに瞳は、まるで紅真珠のようだね。」

「べにしんじゅ？つてなに？」

「王都で取れるとても高価で美しい宝石さ。」

「サツシユは王都から来たの？」

「ん、まあ・・・そうだね。家が王都にある。」

「王都って遠いんでしょー？ここには何しに来たの？」

少女のアザに興味があつてここまで付いてきたのに、なにやら質問攻めに逢っている事にとまどいつつも、なんとか会話の流れをアザの事に持つていきたかつた。

「家出してね、一人で旅をしてるんだ。」

ところで君はずつとこの家で両親と暮らしてるの？」

「うん、パパとママと3人暮らしたよ！この辺は人があまり居ないから、友達はあまり居ないんだ・・・。だからサツシユが来てくれてママもあたしも嬉しい！」

「そうか・・・さつきは、すまなかつたな。覗きのようなマネをして。」

実はさつき君の背中にアザのようなものが見えたのだが・・・」

少女は裸体を見られて恥ずかしがるでもなく、キョトンと彼を見つめている。

「アザ？背中に？」

「ああ。知らなかつたのか？」

「うん、だって自分で背中なんて見えないし。」

「・・・確かにそうだな。」

本人には見えない位置だろう。

本当にあの伝説のモノなのか、もう一度確かめたかつた。

「もう一度よく見せてもらえないか？」

「うん、いいよ！」

少女の背中の布を徐々に捲っていくと、そこにはさつき見たアザがやはりあった。

薄茶色いそのアザは、不思議に竜の形を描いている。

竜の尾は波打ち、今にも火を噴きそうなほどに口を開けている。

城にあった本の挿絵とそっくり同じだった。

と、いうことは、この少女のアザはあの伝説の紋章・・・？

サツシユが紋章を見ながら考えに耽っていると、家の外で何かが割れるような大きな物音がした。

物音と共に、戸口に立てかけてあった戸板が割れ、家の中に吹っ飛んできた。

「きゃあっ！！」

サツシユは咄嗟に腰に差してある剣を抜き、外へ飛び出す。

するとそこには馬に乗った軍服の男が二人、剣を振り回し暴れていた。

その馬の足元には、血にまみれて横たわるルイーズの母親の姿が・

「母君！！！」

すばやく駆け寄り抱き起こすが、母親はすでに事切れていた。

ルイーズは状況を全く把握出来ず、戸板の吹き飛んだ戸口で呆然と立っている。

その視線はサツシユの腕に抱きかかえられる母親の上で止まったまままだ。

「おいおい、王軍様のおいでだぞ！金と食料をさっさと出しやがれ！！！」

「ぐずつてるとその女と同じ目に合うぜえ？」
馬に乗ったままで男二人はサツシュに詰め寄った。

「チツ・・・カスめが・・・!!」

サツシュはすでに息の無い母親をそつと地面に横たえてから、穢れた物を見るかのように顔をしかめて男共を見上げ立ち上がった。

それは一瞬の出来事だった。

サツシュの繰り出した一撃で馬が2頭とも足を折り崩れ落ちたかと思ったら、そのまま馬上の男たちにも一閃を見舞い、一瞬のうちに男共は意識を失い地面に転がった。

辺りを見回すと、少し離れたところで少女や母親と同じようなボロボロを纏った男が倒れている。

駆け寄り抱き起こすと、男はまだかろうじて意識を繋ぎ止めていた。しかし見てすぐに致命傷とわかるほどの深い傷を負っている。

「しっかりしろ・・・!!」

「・・・うつ・・・」

かすかに動く口から必死に声を搾り出している。

「ル、イーズ、を・・・まもつ、て・・・」

「わかった。ルイーズは俺が守る。他には何かあるか!」

「あの、子は、もんしょう・・・を・・・」

「焔の紋章のことか!父君は知っていたのか!」

父親は満足そうにニコリと笑うと力無く、息絶えた。

3、哀悼

両親の亡骸は、家の裏手に簡易ながらも墓を作りそこへ埋葬した。

ルイーズは惨劇のあとからずっと、泣き続けていた。

父母が一度に、しかも突然に、目の前で惨殺されるというのは、10歳の少女には受け止めきれないほどの衝撃に違いない。今は泣き疲れて布団にくるまって眠っている。

せめて夢の中だけでも両親にもう一度出会えていれば、とサツシユは思う。

父君の遺言でもある「ルイーズを守って」の言葉の通り、少女は自分で守っていくと決めた。

これまで自由奔放に旅を続けてきたが、そろそろ終わりの時も近いと感じていたところだった。

「ルイーズ、君を王都へ連れて行く。」

目を覚ましたルイーズは涙も力も枯れ尽きたかのように、動くのはゆっくりと瞬きをする動作のみだ。

聞いているのかいないのか、返事は無かった。

「王都へ行けばこの家へはもう戻ることはない。今夜はここで別れを惜しんでくれ。」

サツシユは動かない少女の手を握り語り掛ける。

生気の無い少女の顔を見つめっていると、過去の記憶が蘇ってきた。

先代王妃であるサツシユの母親は、彼が5歳の時に急逝した。死因は不明だった。

突然の最愛の妻の訃報に、現国王である父親はその事実を受け入れられなかった。

半狂乱で暴れて臣下に抑えられる姿も何度も見たし、またあるときはイスに腰掛けたまま生気の無い顔で身動き一つせず1日を過ごすこともあった。

サツシユはもちろん何日も悲しみ泣き続けたが、そんな父親の姿を見てどうにか力になりたいと、子供なりに励ましたりもした。

しかし父親の悲しみは深く、誰にも救いようがなかった。

そんな国王に忍び寄ったのは、当時第一側室で現王妃であるカロリーナだった。

苦い記憶に顔をしかめっていると、ふとルイズがこちらを見ていた事に気が付いた。

「どこか痛いの・・・？」

泣き過ぎてかすれた声で少女は囁いた。

自分のことで精一杯なはずのこの少女は、どうして俺のことなど心配できるのか。

父王などは半狂乱にまでなった。この少女もまだ悲しみに暮れているはずだろうに。

そんな痛々しい心遣いに胸がいっぱいになったが、心配かけまいとその美麗な顔立ちを生かして輝く笑顔を少女に向ける。

「俺は大丈夫だよ。ルイズこそ、泣き過ぎて喉が痛いんじゃないか？腹は減っていないか？」

「おなかは空いてないかな・・・。でも喉が痛い。」

そう言いながら夜の闇に包まれた部屋の中を見渡すと、小さな机の上には昼に母が作ってくれた食事が乗ったままになっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

昼のままになっている食事で、母が死んだという事実を思い切り突きつけられた。

グラリと揺れる頭を起こし、布団から飛び起きると机に飛びついた。そして母の最期の手料理を見つめる。

ここにはもう母はいない。

それでもこれは母の作った料理だ。

食事は2人分用意されていたことから、父の分もそのままになっている事がわかった。

そしてその父ももういない……。

「ママ……パパ……!!」

こみ上げる涙を拭くでもなく流し続け、最後の手料理を口に運んだ。「うっ、うっうっ……!!うええっ……!!」

味などわからないほどにしょっぱい涙でいっぱいだったが、両親の生きた証を噛み締めるように、ゆっくりと口へ運び続けた。

すべての料理を食べ終わり、少女は再び声を上げて泣いた。

サツシユはそんな少女を抱きしめ、自分の事のように胸が痛むのを感じた。

嘆き悲しむ少女をいたわるように、励ますように、背中をなでさつくと抱きしめ続けた。

長く暗い、一生明けないかと思われた夜は徐々に開け始めていた。

泣き過ぎて重い目をゆっくりと開けると、目の前は金色に輝く光で覆われていた。

驚いて少し体を後ろに引くと、それはサツシユの美しい金髪だった。遠い記憶を遡ると、夜通し泣き叫ぶ自分の事を彼はずっと抱きしめ慰めてくれていたように思う。

わずかに動いた気配を察して彼は目を開けた。
そしてまだ抱きしめた姿勢のままの腕に力を入れた。
頭を優しく撫で、彼の青い水晶玉の瞳が少女の赤い紅真珠の瞳を見つめる。

悲しみにくすんでいた瞳にわずかに光が戻っていることに気づいた
サツシユは、少し安心して口を開いた。

「おはよう、ルイズ。」

「お、おはよう！サツシユ・・・！」

驚きながらも力のある声で少女は朝の挨拶を交わした。

身支度を済ませてから、家の裏手でたつぷりと時間をかけて両親の
墓に祈りを捧げる。

もうここへは戻れないかもしれない。
でもきつといつかまた会いに来ます！

だからそれまで、どうか安らかにお眠り下さい。

そして、どうか私のこの先にある道を明るく照らして導いて下さい。
。。。

サツシユとルイズは旅立った。

彼にとっては長かった旅の終わりに向けて。

彼女にとっては長い旅の始まりに向けて。

4、旅立ち

ルイーズの生家から王都までは馬で7日ほどの距離がある。サツシユの乗っていた馬に二人で乗り、道中は様々な話をした。

これから向かう王都は、現在の国の状況を色濃く反映し、廃墟と化している。

国王の情性により衰退した国は、すべてが王妃の言いなりになっており、民から税金として大量の金品や食料をむしり取り、その税金で王宮では贅沢三昧な生活が送られている。

民の暮らしを無視しわが身の贅沢にのみ走る王家に民は愛想をつかし、民はみな王都から逃げ出そうと必死になっている。

しかし王軍がそれを包囲し、監視している。逃げ出そうとした者は発見され次第家族全員が処刑される。

それが怖くて民はみな脱出することも出来ず、恐怖に怯えながら毎日過ごしている。

ルイーズはそんな国の状況を聞くと、

「それならあたしが王様になる！」

それでこの国をみんなが幸せに暮らせる国にするんだ！」

と言い、燃えるような赤い瞳を輝かせながら笑った。

サツシユは当時、墮落していく父王に対して何も出来なかった。

いくら説得しても耳も貸さずに、あの妖艶な王妃の言いなりになっていくのを見るのが耐えられなかった。

そして10歳になる頃、サツシユは王城を逃げ出したのだ。

この国の衰退にも父王の墮落していく姿にも目を背けたサツシユに

とって、ルイーズの言葉は衝撃的だった。

「王様になる、か……。簡単なことじゃないぞ。」

「うーん、そうなの？じゃあどうしたら王様になれる？」

そもそもフアランドアでは女は君主になれない。

ルイーズにとって可能性があるのは君主である国王の妻の王妃、ということになるが、それも相当な高い身分のある者が就くのが慣例なので、いずれにしても彼女には不可能だろう。

……。いや、あの紋章の件を明かせばもしくは……

何か深く考え込んでいるサツシュの顔を見ながらルイーズは、この先に待ち受ける王都の様子を心に思い描いていた。

王軍が包囲する王都……

想像すると、両親を惨殺したあの軍兵が目に見えかぶ。

そして無残に切り捨てられた両親の姿が……。

ルイーズの胸の奥ではまだ傷は塞がらずに、両親のことを思うとまた泣き出してしまいそうになる。

それでも天国で見守っている両親に心配をかけないように、唇をきつく結んで涙を堪えた。

あの2人の軍兵は、サツシュが最寄の町の軍宿舍へ連行し、罪の無い民を惨殺したとして罰するようにならされたようだった。

サツシュの言うことを2人はその場で素直に認めたので、上官は二人を厳しく処罰すると言ってくれた。

本当に厳しく処罰されるといいと思う。そして他にこんな悲しい思

いをする人が増えないで欲しいと思う。

「ねえ、サツシユ！」

考え込んでいた彼は、突然大きな声で呼びかけられて驚いた。

「んっ？どうした？」

「あたし、この国のために出来ることをしたいの。」

でもあたし今は何も出来ないから、これからたくさん勉強したい！
サツシユがあたしに教えてくれる？」

「ルーズ・・・君はなんて・・・！」

王子である自分が放棄した事を、何の身分も称号もない10歳の少女が本気で訴えている。

幼いからこそ言える無謀なだけの言葉だろうか。
それとも本当に成し遂げる力があるのだろうか。

「いいだろう！俺が一から教え込んで鍛えてやる！」

「ビシバシやるから覚悟しろよ？」

「ありがとうサツシユ！」

少女は燃える瞳を希望でさらに輝かせた。

5、帰郷

王都の入り口に着くと、大きく重々しい門が立ち、都をぐるりと囲むように高い石垣で覆われていた。

「現在王都は出入りが厳しくチェックされている！

そなた達、王都へは何用か、また身分を証明するものはあるか！」
重々しい門の横には軍兵が2人立ち、出入りする人物をチェックしていた。

「我らはこの王都にある家に帰るだけだ。

私の名は、サツシュ「フォン」フアランドアだ。通していただけるか？」

フアランドア・・・？

サツシュのフルネームを聞いたルイーズは、名前に国名が入っていることに少し驚いたが、それが何を意味するのかわからなかった。サツシュが不機嫌そうに名を名乗ると、軍兵は馬にまたがる二人を訝しげに見た。

「サツシュ・・・？5年前から行方不明なはずの王子の名ではないか？」

「確かそうだな。王子がお供も連れずに一人で歩くか？

しかもお供どころか小汚い子供を連れてるぞ？」

軍兵はコソコソと馬上の二人を交互に見ながら話している。

馬上の二人にその声は聞こえないが、明らかに怪しんでいることはわかった。

重そうな門の横の小さな小屋から、一人の兵士が出てきた。

二人の軍兵の上官らしいその男は門前で何やらもめている様子を見て駆け寄ってきた。

「何事か！」

「ハッ！この者が開門を求めておりますが、何分怪しいもので……」

その上官はサツシユの姿を見ると目を大きく見開き、その場で硬直してしまった。

「あ、貴方は……！」

驚き硬直したままの男にサツシユはもう一度語尾を強めて言う。

「通していただけるか？」

「はっ、はい！すぐに……！」

上官のただならぬ様子に本物の王子だったのだと悟った2人の軍兵も、そそくさと開門作業に移る。

ルーズだけは何故この軍兵達があわてているのかわかっていない。

……よほど有名な名前なのかな？

まだまだ知識のないただの少女にとってはしようのない事だ。

門をくぐり王都の中へ馬を進めると、そこは想像していた以上に荒んだ民家が並んでいる。

並んでいる、とは言っても家の形を残していない建物も多く、住んでいるはずの住人の気配はほとんど無い。

形の残る家の窓や戸口には厚い板が打ち付けられ、中の様子は全く見えない。

サツシユは5年ぶりに帰った都の様子にショックを隠しきれない。

旅立った時にはまだ人の往来も多く、商売も行われていた。

旅の途中で出会う行商達に王都の様子を尋ねても、「王都では商売

にならないから、ここ数年は都へは行っていない」と答えが返ってきていた。

その返事からも王都が廃れているのだろうとは想像できたが、まさかここまでとは……。

彼の前で馬に跨るルーズも、同じように言葉を失っていた。

これが王都？

国の中心である都？

人の姿はないし、家という家にはみんな板が打ち付けられて人が出入りしている様子は全くない。

空気もどんよりと重く濁った感じがする。

二人は口を閉ざしたまま馬を進めた。

都の中心部へ向けて進むと、家の形をしたものは無くなり、深い森が突然現れた。

高い木々を掻き分け道のない道を進んでいくと、光の先には大きな城があつた。

「着いたぞ。これが俺の家だ。」

「はっ！??？」

あまりにも大きくて一見ただけではどこまで城が続いているのか見えない。

高くそびえ立つ城の頂点部分には大きな旗が風に吹かれ揺れている。旗には大きな竜が描かれ、大きく開いた口からは火を噴出している。その竜の周りを金色の模様で縁取られている。

「サツシユ、ものすごい大きな家だね・・・」

「親が金持ちでね。」

と、サツシユは皮肉そうにニコリと笑うと馬を降り、馬上のルイズに手を差し出した。

城の前に馬をつなぎ止め、門の呼び鈴を鳴らす。

しばらく待つと、静かに門が開いた。

中から出てきたのは細く青白い中年女性だった。

青白い女性は門を開けた途端に視線をサツシユに向け、目を見開き青い顔をさらに青白くしていった。

「サツシユ殿下・・・！！！」

「ナタリー、今帰った。長い間すまなかった。」

「お・・・おお・・・！！よくぞご無事で・・・！！！」

ナタリーと呼ばれた青白い女性は、目から大粒の涙をポロポロとこぼしながらサツシユの手を握りしめた。

「5年、でございます！！その間城の者がどれほど貴方の事をお待ち申上げていたか・・・！！！」

「だからすまなかったと言った！とにかく、早く部屋で休みたいのだが？」

涙の止まらないナタリーは口からもれる嗚咽をこらえながら門を押し開け、中へ、と促した。

その時になつてやっと、サツシユの後ろでことの成り行きをじつと見つめる子供がいるのに気づいた。

「殿下、その者は？」

見るからに貧しそうな身なりの子供は、頭から足先まで茶色く薄汚れている。

「この者は俺の妹だ。血のつながりは無いが、この者は私が世話すると決めた。」

城で身なりを整えてやってくれ。」

全く理解出来ない、という表情で口をポカンと開けるナタリーを背に、サッシュはルーズの手を引いて城内へと足を進めた。

6、人のぬくもり

城内に入ると、次々に使用人達が駆け寄ってきた。

そして全員がサツシユに詰め寄り涙を流しながら歓喜していた。

「良かった・・・ご無事で本当に良かった・・・！」

「ずっとずっと、お待ちしておりましたよ！」

「こんなにも大きくなられて・・・」

10歳で旅立ったサツシユにはまだ少年の面影があったのに、戻ってきた時にはもう大人の体躯になっていた。

顔つきは相変わらず美麗でうっとりするような笑顔もそのままだ。

一通りサツシユに挨拶をすませ感動に浸り一息つくと、徐々に使用人達の視線は後ろでひっそりと立っている赤毛の子供へと向き始めた。

「殿下。その子供は・・・？」

「これは私の妹だ。血のつながりはないが、私はこの者を守ると決めた。」

「皆もそのように扱ってくれ。」

先ほどナタリーに言ったものと同じようなセリフを言い切ると、周囲の使用人達も先ほどのナタリーと同じような表情のままあつげにとられている。

「は・・・はあ・・・？」

たくさんの人々の訝しげな視線を一身に集め、少々居心地が悪そうにしながら少女は申し訳なさそうに口を開いた。

「あ、あの、ルイズです。よろしく願います！」

ペコリと勢い良く頭を下げると、茶色くくすんだ髪の毛がバサッと振り下ろされた。

「ルリーズ様はまずはご入浴ですね。こちらへどうぞ。」

ニッコリと笑いながら手を差し伸べてくれたのは、茶色いショートヘアがクルリとカールした若い女性だった。

「では私がお湯の用意をしてみります。」

カトレア、ルリーズ様を客間へお通しして。」

ナタリーはきびきびとした口調で、ルリーズに手を差し伸べた女性に向かって指示した。

「かしこまりました。こちらへどうぞ。」

カトレアはゆっくりとした歩調で奥へと案内した。

歩きながらルリーズは素朴な疑問を口にした。

「あの、サツシユは・・・一体どういう人なんですか？すごくお金持ちみたいだけど・・・」

「えっ!」

カトレアは立ち止まり少女を振り返ると驚きの声を上げた。

「サツシユ殿下は現国王と先代王妃とのお子様で第一王子でございます!」

「ご存知なかったのですか!??」

「えっ、ええええええ!!!」

サツシユが、おっ、王子様あああ???

だってそんな・・・一言もそんなこと言ってくれなかったし・・・そっか、でもだから門のこの兵士はあんなビックリしてたし、こ

のお城もでつかいし、なんだか人もたくさん居るんだ・・・。

「サツシユ殿下は・・・」

カトレアは驚き言葉もないルリーズに向かって静かに語り始めた。

「殿下は10歳になられた頃にこの城を飛び出されました。」

『心配せずに。探さないように。』と書置きお一人で旅に連れられたのです。」

ゆっくりと歩きながら、彼女は当時を思い出し悲しげな顔をした。

「殿下は、旅に出られる前までまだ幼いながらも非常に気を張って

おられました。

母君であられる先代王妃様が亡くなられ、国王様が荒れてしまわれ、どんどん衰退していくこの国をなんとかしようと、ご尽力されました。

「しかしまだ幼い殿下のお力では出来る事も僅かでした。目的の部屋の前にたどり着き、彼女は足を止めた。」

ドアを開けるとルイーズを中へ入るよう促し、ふかふかのソファへと座らせた。

「当時の殿下は毎日毎晩、無力さに嘆いておいででした。」

ある日突然城を出られた時には私どもも途方に暮れましたが、きっと国のためにすべきことをなさるのだろうと、この日まで信じてまいりました。」

彼女が目を上げると、ルイーズの燃えるような瞳にじっと見つめられている事に気づき、罰の悪そうな顔をして慌てふためいた。

「申し訳ございません！ペラペラと少し話しすぎました！」

「あ、ううん！あたしはいいの！サッシュ・殿下のことをもっと知りたいから。」

カトリアは不思議そうな表情をした。

「殿下が先ほど、妹君としてご紹介くださいましたが、殿下の事はあまりご存知ないのですか？」

「どのようないきさつでこちらへ来られたのか、もしよろしければお伺いしても……？」

「うん……殿下と会ったのはほんの10日くらい前なの。」

両親と暮らしていたんだけど、その……親は……今は居ないの。」

あの場の事を語るにはまだ傷は癒えていなくて、思い出すと涙が溢れてしまうので、そこは思い出さないようにした。

「それで殿下があたしの事をここに連れて来てくれたの。」

少女の悲しみを堪えてまっすぐに結ばれた唇を見て、カトリアはそれ以上聞くのはよそうと思った。

そしてソファ―に座る少女の前に膝をつき、固く握られた手をそつと包み込みながら優しく笑った。

「そうでしたか。殿下はお優しい方です。

使用人である私どもにもお心遣いをしてくださいます。

殿下の大事な妹君とあらば、私も微力ながらお力添えをさせていただきます。」「

暖かい手に包まれ、優しい言葉に涙が溢れそうになった。

「ありがとうございます・・・」

7・決意新たに

カトレアがルリーズを連れて行くのを見送って、サツシユは使用人達に向かって指示を飛ばした。

「レイ、シヨウ、図書室から“焔の伝説”について記されている物をすべて集めて、私の部屋に持ってきてくれ。」

「ナタリー、明日王城へ挨拶に向かうから、その旨あちらに伝えてくれ。」

「かしこまりました！」

テキパキと指示を飛ばすと、そのままルリーズの連れて行かれた客間のほうへと足を運んだ。

「この国のために出来ることをしたい」

少女はそう言ってくれた。

王子である自分もこれ以上逃げることは出来ない。

落ちて行く父王にも、衰退の一途をたどるこの国にも、本気で向き合おう。

あの少女がいてくれると勇気が湧いてきて、どんな事でもやれそうな気がしてくる。

不思議な少女だ。

それが紋章の力なのか、彼女の生まれ持った性質なのかはわからない。

自分の右手を開き、目の前に掲げてみる。

城を出た5年前には、ちっぽけで何の力も無かった事に嘆いてばかりだった。

今はもう15歳だ。あと3年もすれば正式に政治に関わる権限も得ることが出来る。

その時までにはまずやらなければならないことを一つずつこなしていこう。

目の前に掲げた右手を、握り締めて心に誓う。
“必ずこの国を復興させ、民を幸せにする”

客間の前まで来ると、中からは談笑する声が聞こえた。

コンコン

「入るぞ。」

「殿下！」

パツとカトレアは立ち上がり、頭を下げた。

サツシユはルイーズの隣に腰掛けた。

「ずいぶんと楽しそうじゃないか。すっかり打ち解けたようだな。」

「うん！カトレアはとっても優しいしわ！」

「そうか、ではこれからカトレアにはルイーズ身の回りを世話してもらおうことにしよう。」

カトレア、いいかな？」

「はい！かしこまりました！」

ルイーズ様、これからどうぞよろしくお願い致します。」

カトレアは、満面の笑みで新しい主に頭を下げた。

そこへ、コンコン、とドアを叩く音がして

「ルイーズ様、お湯のご用意が整いました。」と声がした。

「ではルイーズはキレイに洗ってこい！」

大きな城に激しく不釣合いなボロ布をつまみあげながら、ルイーズはニヤリといたずらっ子のように笑って部屋の外へ出て行った。

ルイーズの後を追って出て行こうとしたカトレアを、サツシユは呼び止めた。

「カトレア、これは他の者には決して話さないで欲しいのだが・・・」

「

「・・・はい？」

「あの少女の背には、竜の形をしたアザがある。

本人はアザがあったことなど何も知らなかったようだが・・・。
良いか、決して、他の者にあのアザが見られることのないように
それからおまえもアザに関して本人にあれこれ話したりしないで
くれ。」

“竜の形のアザ”の言葉でカトレアは何の事を指しているのか察し
た。

「はっ！決して他人に知られることのないよう、配慮いたします！
深く頭を下げてカトレアはルイーズの後を追った。」

豪華な浴室、大きな湯船。

いつも川で体を清めていたルイーズにとって初めての体験だった。
あまりの広さに呆然と立ち尽くしていると、浴室の外からカトレア
の声があった。

「ルイーズ様、お体お流しします。」

「えっ？」

会ったばかりの人に体を洗ってもらうだなんて、なんだか申し訳な
いなー

と思いながらも、この豪華な浴室で一体何をどうしたらいいのかよ
くわからなかったので、申し出を受けることにした。

隅々までキレイに洗ってもらい、湯上りには体中に何やら良い香り
のする香油のようなものを塗ってもらった。

「ルイーズ様のお肌はとっても健康的な小麦色ですね！

でもとても滑らかですわ。」

「いっつも外で畑仕事ばかりしてたから、日に焼けたんだと思うわ。」

香油のいい香りにうつとりとしながらルイズは答えた。

「キレイに洗い流しましたら髪のお色もずいぶんと、変わりましたよ」

クスクスと優しい笑みを浮かべながらカトレアは、入城してきた時のくすんだ髪色を思い出していた。

燃えるような瞳とそっくりの、燃えるような赤毛はキレイに洗い流され艶やかに輝いている。

香油を塗りながらたつぷりとマッサージをもらったルイズはまさに夢見心地になった。

カトレアはそんな少女の姿を見て可愛いな、と微笑みながらテキパキと着付けていく。

あつというまに着付けをして髪も結び、うすく化粧までしてもらった。外はすっかり日が暮れてそろそろお腹も空きだしていた。

「ルイズ様、お夕食は殿下もご一緒にとられるそうです。

少し遅れるそうですので、こちらでしばらくお待ち下さい。」

とても細長いテーブルに白い食器が並べられている。

遠くの向かいの席にはサツシユが座るのだろう。豪華なイスが一脚置かれている。

カトレアによつて高い位置に髪の毛が結び上げられたことで、ルイズは首元が非常にそわそわした。

ふわりとした手触りのいいドレスまで着付けられ、まるで自分ではないような感覚だ。

キョロキョロと落ち着かない様子で辺りを見回していると、サツシユが入ってきた。

席につきそわそわしているルイーズを見ると、驚きの表情で足早にルイーズに近寄った。

「おっ？見違えたな・・・可愛いじゃないか！」

「そっ、そう？変じゃないかな・・・？」

「お姫様みたいだぞ。うん、よく似合ってるよ！」

そう言つとサツシユはテーブルの向かい側に置いてあつた豪華なイスを持ち、ルイーズの横へと置いてそこへ座つた。

「あんな遠くじゃ話し声も聞こえないからな。」

そう言つて彼はニヤリと笑つた。

次々に運ばれてくる料理は、どれもルイーズの見たこともない物ばかりだ。

赤い木の実が飾り付けられパイ生地で包まれた甘いフルーツの味とするタルトは、とくに美味しかった。

他にも何の肉かはわからないが、とても柔らかくよだれが溢れそうなステーキや、甘くて黄色いトロツとしたスープ、色とりどりの野菜やフルーツがキレイに盛り付けられて運ばれてきた。

生まれて初めて！というくらいいたらふくお腹に詰め込んだルイーズは、急激な眠気に襲われ始めた。

「ルイーズ、これからのことだが。」

サツシユが眠そうなるルイーズに気づいて、眠つてしまつ前にと話し始めた。

「約束どおり、明日からたくさん勉強してもらつぞ。」

ここにはたくさんの書物があるから、それをまずは読み尽くしてもらつ。

歴史、政治、経済、貴族社会のことなど、学ぶことは山ほどあるからな。」

「あ、殿下あたし・・・読めないんだけど・・・」

ルイズはほのかに頬を染めながら恥ずかしそうに言った。

「ん？ではまず読み書きからだな」

あはは、と高く声をあげてサツシュが笑ったので、ルイズも一緒にえへへ、と笑った。

7・決意新たに（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

徐々にお気に入りに登録してくださる方が増えていて非常に嬉しいです。

読んでくださる方がいる、というだけでとってもやる気が湧いてきます！

サブタイトルが見にくかったので、少し変更しましたが内容は全く変わっていません。

8、改革者

次の日の朝、サツシユは城内にいる者をすべて集めて、ある大きな政策を発表をした。

王家でこのような事をした者は、今だかつて無いだろう。

「この王子宮を、民に開放する。」

王子のあまりにも唐突な発言に、あつげにとられ言葉を発する者は誰一人いない。

それは昨日の晩餐でルイーズから提案があつた話だった。

「この食事を、他のみんなにも分けてあげられないの？」

こんなにも美味しい料理を作る事が出来るなら、あたしや殿下だけでなく貧しく苦しんでいる民にも分けてあげられるはずだわ。」

「うむ・・・実はそれは俺も考えていたんだ。」

王都を出て旅の中で出会った人々はみな、おまえも含めてだが、貧しくとも幸せそうだった。

裕福な物資などなくても、家族で知恵を出し合い工夫し協力しあっていたようだった。

旅に出て、外の世界を見て初めてわかったが、この城は無駄だらけだ。

この無駄をもっと有効に使うべきだと俺は思う。

例えば今おまえの言った食事だが、食べきれないほどの食事を一夜で消費するくらいなら、何日も食べる物もなく飢えている人に分けるべきだ。」

「うんうん・・・あとさ、あのお風呂！あたしあんな広いお風呂初めて見てビックリしちゃったんだけど、あんなに広いならみんなと一緒に入っても十分余裕なんじゃないかな！」

「確かに・・・公衆浴場というものも、旅の途中では見たことがある。」

「それもいいかもしれない！」

ルイズの新しい発想は、民の目線に最も近い物だ。

旅で民の生活を見てきたとはいえ、サツシユの思いもよらないような発想が飛び出してくる。

あつげにとられる使用人達の反応があまりにも予想通りだったので、少々面白くなりサツシユはニヤリと口の端を上げた。

「まずは、食堂と風呂を開放する。」

食堂では民の憩いの場として、食べ物や飲み物を提供する。

風呂は公衆浴場として、誰でも気軽に体を清め、疲れを癒せるようにする。

「・・・以上の所で質問のある者はいるか？」

頭をフル回転させて、ナタリーは相変わらず青白い顔をしかめながら、王子の言葉をなんとか理解して手を上げた。

「殿下、それはつまり、民がこの城に自由に出入りするという事ですか？」

「そうだ。」

「それは賛成致しかねます。」

不審者が民にまぎれて進入したらどうなさるのですか。

殿下の身に危険が及ぶような事をお許しするわけには参りません
！」

「うむ、それは正論だな。」

今民の中には王家に不満のある者も多いだろう。

では開放するのは宮の一部に限定してはどうだ？

食堂と風呂を開放するのであれば、宮の最深部までは通る必要はないから、そこへ至る部分に扉を作り民が入れぬようにしたらどう

か。」

ナタリーはしぶしぶ、という表情を露にして引き下がった。次に料理長が手を上げた。

「殿下、食事を民に提供するとおっしゃいまして、民の分すべてを賄う量を作るのは困難かと・・・。」

「昨夜のような豪勢な料理を民すべてに作れと言っているわけではない。」

それではさすがに材料も資金も足りぬであろう。

そこまでせずとも、昨夜のタルトのようなものであればすぐに大量に作れるのではないか？

あれは材料はたくさん取れるはずだな。」

「ええ、確かに材料は周辺の木の実や城で栽培しているフルーツを使っておりますので可能です。」

「ではそのタルトと、香茶くらいは出せるな？」

もごもごと小さく返事をしながら料理長も後ろへ下がった。

「他に質問のある者はいないか？」

誰も口を開かず、身動きすらしなかった。

どうやら全員が納得していない様子を感じ取ったサツシユは、輝く青い瞳で全員を見渡しながら話した。

「私は旅の中で、民の生活を見てきた。」

この国の民はほとんどが貧しく飢えている。

特にこの都の者は最も苦しんでいる。

・・・王妃が税金としてすべてを奪い取ってしまったのだらう。」
輝く瞳が一瞬苦痛に歪む。

サツシユは“王妃が”と言ったものの、すべてが彼女の責任ではなく、王家全体の責任であることをよくわかっていた。

「それに比べてこの城にはなんと無駄の溢れていることが！

無駄に広い部屋、無駄に広い風呂、無駄に多い食事、無駄に多い衣服。」

それらの幾分かでも民に分けてやれたら、少しでも民の苦痛を和

らげることが出来るはずだ。

もちろんこの城の無駄は君たち使用人のせいでは決して無い。

ここまで浪費してきた王家の歴史であり、そう指導されてきた君らになんら落ち度は無い。

私も城を出るまで、これが当たり前の生活なのだと信じて疑わなかった。

君らが責任を感じる必要は無いが、この城の無駄を無くし民を救う為に力を貸してくれないだろうか？」

しばらくの静寂のあと、

パチパチパチ……

どこからともなく手を打つ音が響いた。

徐々にそれは大きくなり、その音の大きさにサツシユは心を奮わされた。

この策に皆が賛成し、応援してくれている。

どれほどの民に理解してもらえるか全くの未知数だが、それでも俺は進むしかない。

この国のため、力の限りを尽くそう！

その日のうちに都には王子直筆の御触れが張り出された。

『王子宮を無料で開放し、すべての民に食事と風呂を提供する。

サツシユ＝フォン＝ファランドア』

ルイズはサツシユの言いつけ通り、読み書きの勉強の為に図書室に閉じ込められた。

カトレアが身の回りの世話をしながら指導に当たった。

少女は予想以上に覚えが良く、一日で読み書きをマスターしてしまった。

「子供じゃないんだから、一度見れば覚えるわ！」

と強気に言いながらも、目が充血して赤い瞳をさらに真っ赤にしている少女を見て、カトレアは「将来が有望ですわ」と優しく笑いながら言った。

サツシュは王宮へ向かった。

王宮には国王と王妃、それに生まれたばかりだという王妃の子がいる。

正確には王妃とその子は王宮に隣接している後宮に住んでいるが、王妃はほぼ王宮に入り浸っている。

5年ぶりに訪れる王宮は、廃れた都とは逆に5年前よりさらに豪華絢爛に飾られていた。

「父上、ご無沙汰しております。長い間留守にした事、申し訳ございません。」

「サツシュ殿下！一体どこをほつつき歩いておられたのですか？」

国王陛下がどれほど心配しておられたとお思いか！」

キンキンとどこから出るのかと思うほどに高い声で王妃であるカロリーナが詰め寄った。

心配していた、という当の国王は生気の無い顔つきで王座に腰掛けたまま動かない。

その様子を不信に思ったサツシュが「父上どうかされましたか？」

と問いかけると、

「大事無い。病で少し体調を崩されておいでだ。」

とカロリーナが今度は太い声で威圧的に答えた。

病だと？

体調不良という感じではなく・・・目は開いているが意識が無く眠っているかのような・・・

・・・これはどういう事だ？

眉をひそめじつと国王を見つめるサツシユに、カロリーナは再びキンキン声を張りあげた。

「陛下は体調が悪い！用が無ければご自分の宮へお下がりなされ！」

「・・・その宮の事でご報告がございます。」

このたび私の宮は一部を民に開放することにしました。

食事と風呂を無料で提供します。」

「なっ・・・！なんですと！??？」

そんな事、許されませぬ！」

王家の資産である宮や食事を民などに分け与えるなどと・・・！」

「義母上、民は貧困に苦しんでおります。」

都の様子を少しでもご覧になりましたか？」

「ふん・・・あんな汚らしい物！私の知ったことではない！」

「ですが義母上、民の生活がままならないこの現状では、税を徴収することすら難しいはずです。」

民の生活が今回の開放によって少しでも回復に向かえば、また税も徴収できるといふものです。」

下を向き頭を下げたまま、サツシユは淡々と述べた。

その表情はカロリーナからは読み取れない。

・・・確かに、ここ最近では民から徴収する量が減っている。

それは軍兵どもめがきつと甘いやり方をしているのだろうか・・・。民の生活などどうであろうが知った事ではないが、どうせ開放して財産が減るのは王子宮。私の生活にかかわる問題ではない、か・・・？

「よいであろう。国王陛下には後ほど私が言い伝えておこう。」

「もしも願うならば、義母よ。」

9、信用する者しない者

日がすっかり落ち、王都は夜の暗闇に包まれている。物音も人の気配も全くない。

ただ一箇所だけ、大きめの建物の中で月明かりの中人の話し声がする。

この都に住む若い衆はたびたび、皆が寝静まると集会を開いていた。

「・・・どう考えても罠だろう。これまであんな仕打ちをしておいで今更・・・」

黒い髪の大柄な男は眉を潜めて話を続ける。

「そう、今更だ・・・王家の連中は何を考えているんだ？」

するとやや小柄な銀髪の男が大柄な男に詰め寄るようにして言った。

「いや、今回ののは王子の独断のようだぞ。」

「王子？あの行方知れずだったとかいう？」

「ああ、今15歳くらいらしいな。ガキの発想だよ全く。」

どうせ俺らが貧しいからってちよつと媚を売るつもりなんだろうさ。」

いつせいに暗闇の中でチツと舌打ちする音やら不満を露にする気配で溢れる。

「ラッセル、どうするつもりだ？」

ラッセル、と声をかけられた大柄な男は若い衆のリーダー格だ。

長く黒い髪を後ろで一つにまとめ、大きなその体は筋肉で全身が包まれている。

一瞬考え込むようにラッセルは、その切れ長な瞳を細めた。

「どうもこうも、王家の奴らの言うことに今更耳を傾けるなど愚行以外の何でもない。」

俺らは今までどおりで行く。情報収集と武器の調達と訓練だ。

エド、情報収集はこれまで通りおまえにまかせる。頼むぞ。」

エド、と呼ばれた小柄な男は肩ほどで揺れる銀髪を耳にかけながらニヤリと笑うと「まかせとけ」と言うと、あっという間に闇夜に消えていった。

王子宮には初日こそ誰も訪れる者は居なかったが、1週間ほどすると徐々に人が集まり始めていた。

「このタルトは絶品だなあ！」

「ええ、ついつい毎日足を運んでしまっねえ。」

老夫婦が湯上りの体を休ませながら、食堂で話している。

食堂には10人ほどの中高年の民が腰をかけ、美味しいタルトと暖かい香茶を口にしながら談笑していた。

風呂もかなりの盛況で、一日に何度も入浴しに訪れる民も少なくなかった。

「湯加減はいかがでしたか？」

突然食堂に現れたサツシユの姿に、さきほどの老夫婦は驚きイスから落ちそうになった。

「こつ、これは王子様！おお・・・、ありがたいことです・・・」

とつてもいい湯でございましたよ！」

「それは良かった。ところで・・・」

サツシユは食堂を見渡しながら気になっていた事を問いかけてみた。

「ここにはどうもご年配の方々しか訪れないようだが、若い衆はどうしている？」

「あ、ええ、若い衆はどうも頭が固いようでここへは来ようとせんのです。」

ワシらは先代王妃様のご健在の頃の王家をよう知っております。

あの頃の都は商売も繁盛して活気にあふれておったものじゃが、先代王妃様亡き後の今の都は・・・。

「ここ数年の王家しか知らぬ若い衆にとっては王家のことを簡単には信じられんのじゃと思います……。」

「……そうか……。」
口をきつく結び考え込んだ王子の様子を見て、老人はハッと口を押さえてイスから降りて膝まづいた。

「おっ、王子様、申し訳ございません！！王家に対してこのような物の言い方を……！！」

わ、わしは、決してそんな……！！その……」
サツシユはあわてて口ごもりながら深々と頭を下げる老人の前に膝を付き、彼の肩に手をかけた。

「頭など下げないで下さい。私は民の素直な声を聞きたいのです。」

5年もの間留守にしていたからこの国の現状をよく知りたい。顔を上げたサツシユの青い瞳が何か閃き輝いた。

「……そうか、目安箱など設置してみたらどうだろうか？」

匿名でかまわないから皆、王家に対して望むことや今の生活に足りない物などを書いて投稿してはくれないか！」

食堂にいる全員に聞こえるように声を大きくして立ち上がった。

「目安箱は食堂に、明日にでも設置しよう！」

そうと決まればすぐに用意を！」

ハッ！と側で控えていた数名の使用人のうちの一人が短く返事をし、食堂を後にした。

その日の午後、王子宮にはある古美術商が呼び寄せられていた。

「この宮にあるものを適当に見繕って買い取ってもらいたい。」

「はっ！？適当に、でございますか？」

「ああ、売ってもよい品はすべてそっちの客間に詰め込んでおいたから、その中にある物で値打ちがある物があれば、買い取ってもらえんだろつか？」

サツシユは王子宮の中にある豪華絢爛な家具や装飾品を売りに出し、

その資金を改革の為の費用に回そうと考えた。

売りに出す品はすべてサツシュが選別していったのだが、次々に「
いらぬ、これもいらぬ」と選り分けていく様子に、使用人の中
でも古株のナタリーはもともとの青い顔を相当青くして悲鳴をあげ
続けた。

客間へその品達を見に行った古美術商も、部屋に入った瞬間から青
い顔をして悲鳴をあげた。

「ひいつ！こつ・・・これを全部売りに出すおつもりで・・・っ！
！??？」

「ああ、無理か？」

「無理、ではございませんとも！王家のゆかりの品は高く売れます
から・・・。」

ただこれだけの量でございますから、すぐにまとまったお代を用
意するのは厳しいかと・・・。」

「それはかまわない。用意できるぶんだけでいい。

残りはこれらが客に売れて代金をもらったら、こちらに払っても
らえたらいい。

君の事は信用している。もちろん持ち逃げなんてしないでらう？」

「もちろんでございますっ！！」

この古美術商とは旅の途中で出会った。

借金の方にと持ってきた貧しい者のたいした値打ちの無い品も、赤
字を覚悟で親切に根をつけて引き取っていた。

その様子を見てサツシュが「いいのか？」と尋ねると彼は、

「いいのです。貧しい民からお金などいただかなくとも、貴族の方
々は湯水のようにお金を使って下さいますから。そちらから頂いて
おります。」
と答えた。

「君は人を騙したりしないらう。」

ニツコリと微笑むサツシユの青い瞳に見つめられ、男同士でありながらもついその美しさに見惚れてしまいそうになる。
「はいつ！ご期待に副えるよう努力致します。」

10、希望の中で

明るい太陽が頭上で照りつける中、その場所は薄暗くしんと静まり返っていた。

たくさんの本が机の上に積み重ねられ、その本の山に埋もれそうになりながら赤い髪の少女はじっと読みふけていた。

その燃えるような髪色を確認すると、サツシユはそつと声をかけた。「ルリーズ、調子はどうか？」

少女は集中していたので、彼がすぐ側まで近づいていた事に気づかなかった。

「殿下!どうしたの?こんな所へ？」

あ、さてはあたしがさぼってるとでも思ったんでしょ!」

ちよつと口をとがらせながらルリーズは、目の前のイスに腰掛けたサツシユを覗き込んだ。

「いや、おまえが毎日マジメに勉強してることは、ちゃんと聞いてるよ。」

今日はここで俺も仕事をしなくてね。

静かな落ち着いた場所で見たい書類があるんだ。」

そう言つとサツシユは目安箱に入れられた紙の束をバサツと机の上に置いた。

食堂に設置された目安箱には、すぐにたくさん意見が寄せられた。

「家が古くて今にも崩れそうだが修理しようにも木材も金もない」

「着るものがない」

「商売道具を全部取られたので商売が出来ない」

「食べる物がない」

などなど、切実な訴えばかりだった。

「ルリーズならどうしたらいいと思つ？」

その紙の束を、目の前で本を読んでいるルイーズに渡し、意見を求めた。
書類に一通り目を通してルイーズは大きな赤い瞳でサツシュを見つめた。

「この城に来る途中の林、あれ切っちゃえば木材はたくさん用意できるんじゃない？」

それで家を作ればどうか？

あと着るものはここには溢れてるじゃない。

あ、でもこんなのはこのままじゃきつと動きにくいから、動きやすいように切ったりしてみたらたくさん衣服が出来るわ。」

自分が今着ているワンピースのような衣服をぴつと指でつまんで見せた。

ふわふわしたドレスやヒラヒラしたマントなど、仕事や家事をする上で民にとっては邪魔でしかないだろう。

「あと、食べる物だけど、あたしの家なんかは自分達で食べる物は全部畑で作ってたわ。」

その林を切り開いたら、大きな畑をたくさん作れるんじゃないかしら。」

サツシュは次々に出てくるルイーズの提案に、まさに目から鱗が落ちるような思いで聞き入った。

「そうか・・・！素晴らしい案だ！」

そうするとその林を切り開いたり家を建てたりする段階で必要ない人手を、民から募集して賃金を支払えば立派な仕事になるな・・・！

あとは畑も民の中から畑の知識のある者に代表になってもらって、たくさん民に畑を作ってもらおう！」

ルイーズの案を受けてサツシュがどんどん改革案を広げていく。

どんどん広がっていく案に青い瞳がキラキラと輝き顔中に笑顔が溢れていく。

そんな様子を見ながらルイーズは、自分もとても幸せな気持ちに包

まれていくのを感じた。

「すごいぞ、ルイーズ！君のおかげでたくさんの改革案が実行できそうだ！」

ありがとう！

さっそく実行にうつさないとな！」

そう言うとサツシユは颯爽と図書室を後にした。

残されたルイーズは、自分のやるべき事にまた集中しようと、目の前に開かれた本に目を落とした。

すぐに城の中と都にお触れが張り出され、翌日にはたくさんの人手と知識のある者が集められた。

その中には、元大工で工具などを取られてしまっただけで仕事が出来なくなっていた者や、畑をたくさん抱えていたがその土地を没収され、軍兵の休憩所などを建てられてしまった者なども多くいた。

そうだった知識のある者をリーダーに据え、他の民に仕事を振り分けて作業に取り掛かってもらった。

意外だったのは、集まった民の中には若い衆も多く居たことだ。

「ラッセル、いいのか？こないだは愚行とかどうとか言ってたが……」

エドはずっとしかめっ面のままで作業の振り分けに従うラッセルに問いかけた。

「……俺らは王家の奴らに従うわけじゃない！」

ただ、家が無く凍え死んじまう年寄り連中をこれ以上見てられねえだけだ！

家を作る材料も工具も用意してくれるんなら、それに手を貸すぐ

「らいはしてやるうじやないか。」

ラッセルは眉根にグッとシワを寄せて憎しみを込めて拳を握った。

「ま、確かにな・・・。こうして王家の連中の隙をみて武器になりそうな物も簡単に調達出来そうだし、情報も手に入れやすくなるだろうしな。」

「・・・そうだな。うまく集められれば決行は早まるだろう。」

王子宮の上層部から、林の手前に集められた群集を見つめるサツシユは、不穏な空気を纏う者も居る事に気づいて目を光らせた。

「レイ、シヨウ、若い衆はまだ王家に不満があるはずだ。

何をしでかすかわからないから注意してくれ。

特にあの黒い髪と銀の髪のやつからは目を離すな。

何か不審な動きがあつたらすぐに教えてくれ。」

「ハッ！」

レイとシヨウはいつもサツシユの側に控えている双子の側近だ。

双子なだけあつて、濃い灰色の髪の毛や落ち着いた大人の雰囲気のある顔つき、スマートな体はすべてよく似ている。

二人は、どちらかが監視につきどちらかが殿下の護衛を務めようと目で意思を確認しあい、レイがその場に残りシヨウは群集の監視に就くために走り去った。

あの若い衆の二人、明らかにすべてに納得して参加しているわけではなさそうだ。

王家に不満はあるが、都の復興の為であれば協力する、か？
それとも作業するふりをして何かしようと思んでいるのか？

シヨウからの報告があるまで様子を見てみよう。

その日の昼過ぎにシヨウがサツシユの元に報告にやってきた。

「銀髪のほうの男が、ここに侵入し宮の奥へと通じるドアの鍵のス

ペアを盗みました。いかがなさいますか？」

「なんて手が早い連中だ！」

とサツシユは笑い飛ばした。

「連中はおそらく鍵が紛失した事がばれて鍵が変えられる前に奥へ侵入しようとするだろう。」

ならば・・・そのままほっておいていい。俺に考えがある。」

金色の細やかな細工の施された鍵を手の中にぎゅっと握り締めながら、ラッセルはエドの肩を叩いた。

「よくやったぞ、エド！これで中を探れるな。」

「ああ、でもきつとすぐにはれるから、行くなら早いほうがいい。」

「・・・よし、じゃあ今すぐに行こう。」

本当なら日が落ちるまで待ちたいが、そうすると紛失に気づいて警備が厳重になるだろうからな。」

ラッセルとエドは周囲で作業を続ける男達に気づかれないよう、そつとその場を抜け出し王子宮へと向かった。

11、二人の思い

「ルイズ、ちょっと休憩に行かないか？」

図書室の本で毎日勉強に明け暮れている彼女の元に、サツシュは軽やかな足取りでやって来た。

「うん！行く行く！丁度いま一冊読み終わったところだから。」

そう言うと彼女も軽やかな足取りで彼の後に続いた。

「この奥に、果樹園があるんだ。この城で出されているフルーツはみんな、ここで調理師達が自分で育てて採取したものを調理しているんだ。」

今はちょうどいい季節だと思うぞ。」

ルイズは何が“ちょうどいい季節”なのかよくわからなかったが、初めて見る果樹園に心はウキウキと跳ねていた。

図書室を出て城のさらに奥へと進むと大きな扉があり、その扉を押し開けると眩しい光が目を射し、甘くさわやかな香りが鼻に届いた。「うっ、わぁ・・・！すごい！」

見渡す限りのたくさんの木には、赤や黄色の様々なフルーツが実り、そのどれもが甘い香りで誘惑している。

「すごいだろう？このフルーツがみんな甘くて美味しいから、うちの調理師の作るタルトは絶品なんだ！」

「このフルーツを・・・納得！あれすっごい美味しいもんね！」

「ああ。そっちにイスがあるから腰掛けよう。」

イスに座ると、周囲360度すべてがフルーツの実った木でいっぱい、あまりにも甘い香りで誘惑されるのでルイズはなんだかお腹がすいてきてしまった。

横長のイスに二人並んで腰を掛けると、サツシュはルイズの顔を

覗き込んで言った。

「君がこの城に来て10日くらい経つわけだけど、どう?この暮らしには慣れた?」

「うん。今までとは180度違う生活だけど、それなりにやってるわ!」

勉強ばかりで図書室に籠りつきりだからそろそろ城中を探検してみようかなと思ってるの!」

「それはいいが、迷子になるだろうからカトレアに付いてもらえよ?」

「うん、わかった!」

あはは、と屈託無く笑う彼女の赤い瞳をじっと見つめ、サッシュはその美しい顔で優しく微笑んだ。

「・・・ご両親の事だが・・・まだ話したくないならいいんだが・・・」

彼女は笑い声を小さく消すと、その赤い瞳には徐々に悲しみの色が広がっていった。

「・・・ううん、大丈夫だよ。」

「そうか・・・」

君は、ご両親を殺したあの軍兵を憎いとは思わないのか?

あの場で仇を討とうとは考えなかった?」

「憎い・・・そうね、確かに憎いわ。」

彼らが居なければあたしはまだパパママとあの家で変わらぬ生活を送っていたもの。

それを壊したあの男達の事は、生涯忘れられない。」

“憎い”と言い放つ彼女の手は固く握られ、血の気が失せた手の色が彼女の感情を表していた。

「それでも、殺そうとなんて思わない。

彼らは裁きを受けて罰を償うの。それがいいと思う。

公式な裁きを受ける事で、これ以上あたしのような目に合う人を無くす事が大事だわ。

あたしが彼らをあの場で殺したところでなんの解決にもならないもの。」

彼女は手を開き、自分の両の手のひらをじっと見つめた。

「あの軍兵達がどうしてあんな事をしたのか？ってあたし考えたの。彼らは国の兵士でしょう？ならば彼らは国の命令に従ったのよ。」

つまり悪いのは国だわ。

この国を変える事が、パパとママへの最高の親孝行になるの。

殿下はここに来る途中でこの国の衰退は王妃のせいだって話してくれたけど、それなら貴方がそれを止めるべきだわ。

あたしには知識も何の力もないけど、たくさん勉強していつかきっとこの国を変える力になってみせるわ！」

サツシユは驚きのあまり一瞬声を失った。

「・・・驚いた・・・君は本当にあのルイズか？」

そんな事まで考えていたなんて・・・たったの10日でここまで成長したのか？」

出会った時の彼女は確かにただの幼い子供だった。

しかし今の彼女は、少女とはとても言えない雰囲気纏っている。

親を殺した犯人に憎しみを抱きながらも、その根本にある悪を見極め、国を変えるために必要な力を自分で手にしようとしている。

「痛いところを突かれたな・・・」

サツシユは片方の口の端をニツと上げて、片方の手で顔を覆った。

「俺は王子だから王妃を止めるべき、か・・・。」

彼女の燃えるような赤い瞳が指の隙間からチラリと見えて、サツシユは心を読まれているような錯覚に陥った。

「そつだ。俺は王妃の愚行を止められなかったんだ。」

そしてあの女の誘惑に堕ちていく父からも目を逸らした。」

城を逃げ出したあの日の幼く愚かな自分が思い出され、現実を突きつけられる。

「俺は、この国を救ってみせる。」

今はもう逃げ出した頃の幼い俺じゃない。」

サツシユは突然立ち上がると、ルーズの手を引き彼女を立たせた。そして彼女の手をギュツと握り顔中に希望を溢れさせた。その輝く青い瞳はまっすぐに彼女の燃える瞳の奥を見つめている。

「俺はもう逃げない。この国の民を幸せにすると誓うよ！」

だからルーズ、君はずっと見守っていてくれないか？」

ルーズは不思議と自分に勇気を与えてくれる。

前にもそう思った事があったが、今はつきりと感じた。

彼女がいることで自分は強くなれる。

恋とか愛とかじゃなく、改革仲間のような同士のようなそんな思いだった。

そんなサツシユの強い決意をしっかりと胸に受け止め、ルーズはグツと手を握り返して満面の笑みを浮かべた。

手を握り思いを確かめ合う彼らの背後に、声を潜めて木の影に身を隠す者達がいた。

二人の会話が終わる気配を察して、その者達は静かにその場を去った。

12、思いを伝える難しさ

ラッセルとエドはお互いに言葉もなく、ただその足を前へと運び続けた。

盗んだスピアキーで城の内部へ侵入し、王子が誰かと話している所を盗み聞きした二人は、その会話の内容にショックを受けていた。

今聞いた会話をどう解釈したらいいものか・・・

今まで自分の考えていた王家に対する感情を打ち消された気分だ。王家は自分達の道楽のためだけに貧しい民から税をむしり取った。逆らう者を容赦なく斬り殺した。

そんな王家に対する憎しみ、怒り・・・そして仲間達と反乱を誓った。

しかしあの少女は親を殺された憎しみを抱きながらも、心の中に不の感情は持っていなかった。

国のためを思い、民のことを思い、自分に出来る事を冷静に見極めていた。

後ろ姿や声の調子からしても、まだ幼い子供のようにだったのに。

反乱など考える自分の方がよほど子供っぽいと思わざるを得なかった。

この先の計画も全て考え直す必要がある。

城の前の林を突き抜けて古びた家の立ち並ぶ都の前まで来て、ラッセルは重い口を開いた。

「今夜、集会を開く。エド、みんなを集めてくれ。」

「わかった。」

そう言ったラッセルの顔には決意の色が現れている。
まだ心の決まらないエドではあったが、ラッセルの固い決意を感じ、彼の心も決した。

夜、静かに寝静まった都の一角で集会が行われた。

ラッセルは皆の視線を集めて静かに立ち上がった。

今日城で見た内容を皆にうまく伝えられる自信はなかった。

自分もすぐには切り替えられなかったからだ。

仲間達の王家に対する憎しみは強く、怒りは深い根を張っている。

それでもこの計画はこれ以上進められないと、説得する必要がある。
・・・

「・・・今日、俺とエドは城の内部へ侵入し、王子とある少女の会話を盗み聞きしてきた。」

ざわっ、と一瞬驚きの声と歓心の声があがる。

「その内容は・・・これまでの俺の考えを覆すものだった。」

神妙な面持ちで静かに語るラッセルの様子に、若い衆は息を殺して聞き入った。

「行方不明とされていた王子が帰ってきてからの、王子の媚とも取れる政策に俺らはむかついた。」

しかしどうやらそれは、王子が一人で考えた政策では無さそうだ。

王子を動かしたキーはおそらくその少女だ。

何者かは知らないが、彼女の器は俺には測り知れないほどのものだった。」

若い衆は、ラッセルが一体何を言いたいのか、いまいちつかめずにいた。

ヒソヒソと眉根を寄せて話し出す声が聞こえる。

「その少女は、目の前で両親を軍兵に殺されたらしい。」

国に対して憎いって気持ち俺らと同じだ。

その憎しみを俺らは反乱で王家に報いるつもりだった。だがその少女はそんな軽い感情は通り過ぎて、もっと前を見ているんだ。

国が悪いなら、自分がその国を変えてみせると！

その為に自分には何が出来たのか、何をしたらいいのか、よく考えて実行に移しているんだ。」

ラッセルはあの城で少女の言葉から受けた衝撃を再び思い返ししながら、皆にもこの思いが伝わって欲しいと願い、一時天井を見上げ瞳を閉じた。

「俺らは反乱を起こして王家の奴らの目を覚ましてやりたかった。

あわよくば連中を全員殺して政権を奪ってやろうと思っていた。

だが俺は少女の言葉を聞いて、自分の浅はかな考えを恥じた・・・

反乱など起こしてこの都や他の民にどれだけの傷が残るか。

反乱が成功しても、力で制した俺らに国を動かす事は出来ないだろう。

そんな事よりも、この都を建て直す為に自分達に出来ることがあるはずだ！

幼い少女ですら自分で考えて未来を見つめているんだ！

俺は反乱なんかではなく、もっと別の方法で都を建て直してみたいんだ！！」

言い切ってから暗がりの中で皆の顔を見渡すと、全員が目丸くしてじっとラッセルを見つめている。

徐々に動揺し納得できない様子でざわざわと声が広がりました。

エドは立ち上がるとラッセルの隣に歩いて行き、話し出した。

「これまでの苦労も、計画も全て白紙に戻すなんて、急に言われたつてすぐには納得出来ないはずだ。

俺だつてあの少女の言葉を直に聞いていなければ納得しないだろう。

けど考えてもみてくれ。

これまで先頭に立って反乱の準備を整えて、王家に対する怒りを一番に表していたのはこのラッセルだ！

そのラッセルがこう言ってるんだから、信じてみてはくれないか？」

ラッセルは隣に立って話すエドを頼もしく思った。

エドはいつも自分の足りない言葉を補ってくれたり、裏での仕事もこなしてくれる。

自分を一番に理解し力になってくれている。

隣に立つエドに勇気をもらい、ラッセルは再び口を開いた。

「俺は、王子の政策に全面協力するつもりだ。

都を建て直すにはそれが一番の近道だ。

俺からは以上だ。それぞれ自分の身の処し方をじっくり考えてみてくれ。」

次の日、城の前の作業場には大勢の若い衆が集まった。

その全員が率先して作業をこなしていくので、作業効率はぐんと上がった。

サッシュは城の窓からその様子を見ると、満足げに口元を緩めた。

そして次の改革案を発表するために城の外へと向かった。

13、再出発、そして出会い

新しい改革案は、今朝すでにナタリー達側近には明かして了承をもらった。

もちろんナタリーはいつものごとく反論したが、これまでのサッシユの功績を思えば納得せざるを得なかった。

どんなに無謀で前例の無い突飛な案でも、そのおかげで都は活気が戻りつつあるからだ。

「皆、注目してくれ！」

サッシユは声を張り上げて作業中の民たちに呼びかけた。

だいたい集まったところで、皆を見渡しながら期待に満ちた瞳で話し始めた。

「新しい改革案を発表する。

現在ここの作業は非常に順調に進んでいる。

そこで、この中から近衛兵を募集する！

腕に覚えのある者は是非志願してくれ！

実技選考は明日の正午、城内で行う。以上！」

ラッセルはこれぞ俺の仕事だと瞬間思った。

これまで反乱のために鍛えてきたこの腕を生かしてみたい。

隣で作業するエドを見ると、彼もまた同じ思いでラッセルと顔を合わせた。

次の日、城内の演習場には20名ほどの若い衆が集まった。

実技選考は、サツシユの側近の中で最も腕の立つレイとシヨウが志願者の相手をして、それをサツシユが見てその場で合否を決めた。若い衆の中でもリーダー格であったラッセルとエドの腕は、志願者の中でも断トツだった。

ほとんどの志願者はケンとシヨウにかなうはずも無く軽くあしらわれていたが、ラッセルとエドの相手をしている時だけは真剣な表情で押され気味なシーンが何度もあった。

結果的に20名の中から選ばれたのは腕の立つ10名ほどで、残りの10名は今までどおりの建築と畑の作業に戻ってもらうことになった。

サツシユは選ばれた10名の前でこれから頼む、と声をかけてから、その中でも目立って腕の立つ二人にこえをかけた。

「そのの、黒髪と銀髪の二人。君らの名は？」

ラッセルとエドは王子の前に跪き、名を名乗った。

「君らには別の任務を頼む。」

他の者は明日から任務に就いてもらうので今日は解散していい。」

城の中を進むサツシユの後を、ラッセルとエドが付いて歩き、そのさらに後方にレイとシヨウが付いて歩いた。

レイとシヨウは、実技選考でのラッセルとエドの素晴らしい剣筋に悪意や邪念が無い事はわかっていていた。

しかしここで王子に危害を加えないという自信はない。

この二人にこれから与えられる任務を知ってはいるだけに、警戒して二人の様子を見張った。

コンコン

部屋のドアをノックすると中から「はい、どうぞ」と明るい声が出た。

ラッセルとエドが王子に続き部屋の中へ入ると、そこには赤毛の少女がたくさんの本の山の中から顔を出していた。

あの、果樹園で見た少女だ！

自分のこれまでの考えをすべて覆し、目を覚ましてくれた張本人だ。あの時は後姿しか見えなかったが、正面からよく見ると燃えるような紅い瞳をしている。

幼さの残るその表情からは、あんなに前向きで強い考え方は全く想像もつかない。

「ルリーズ、紹介する。こっちがラッセルでこっちがエドだ。

これからおまえの護衛に就いてもらうからな。

仲良くしてやってくれ。」

「護衛？私の？」

「ああ、俺にはケンとシヨウがいるからいいが、おまえにはカトレアしかないだろう？」

彼女では剣は扱えないからな。護衛は必要だ。」

「そっかあ！」

そう言うと少女はラッセルとエドの前に立ち、明るい赤毛をバサッと振り下ろし頭を下げた。

「ルリーズです。よろしくお願いします！」

あまりに豪快な少女の様子に驚いたが、二人は膝をつき頭を下げた。

「ルリーズは俺の妹だ。

血は繋がっていないが、大事な人だからな。

しっかり護衛してくれよ？期待してるぞ！」

「ハッ！」

「そもそもお前達にはシヨウヤレイのような隠密の仕事は向いていない。

ラッセルの大きな体もエドの銀髪も、隠れていてもすぐに見つかる。

その威圧的な風貌でルイーズの周りを見張ってやってくれ。」
「そういうとサツシユはニヤツと口の端を上げて笑った。

「……まさか……！」

「……あの時気づいて……？」

ラッセルはあの果樹園での事を思い出した。

「ルイーズの成長ぶりに俺は本気で驚いたが、おかげでうまくいったな？」

二人は王子の蒼い瞳に見つめられ、全てを見透かされたような気分だったが不思議と嫌な感じではなかった。

イタズラが成功したかのようにニヤリと笑う王子に、むしろ親しみが持てた。

第2章1、それぞれの恋

王都にサツシユが帰ってきてから2年が経つ頃、改革は非常に順調に進んでいた。

畑は徐々に実り始め、穀物も野菜もたくさん採れた。

都には新しい家がどんどん建ち、民の暮らしは快適になった。

活気を取り戻し始めた王都には行商人も足を運ぶようになり、かつてのような賑わう人の声に溢れている。

城の書物でたくさん知識を得たルイーズは、都の人たちの為に学校を開き、読み書きや歴史や算数などの知識を皆にも分け与えた。ルイーズは王都に来てからずっと書庫や自室に籠り勉強に励んでいたので、かつての小麦色の健康的な肌は透き通るような白い肌に変わっていた。

その肌の白さが燃えるような赤毛と大きな紅い瞳を際立たせ、幼い少女から美しいお姫様へと成長した。

学校に通う民からは、知識と美貌を兼ね備えたルイーズは絶大な人気がある。

知識を鼻に掛けるでもなく、王家のように偉ぶるわけでもない。

民の為を思い国の為にと努力を惜しまない彼女を、民は皆大好きだった。

民だけでなく王子宮の住人達も「汚い子供」だった頃からの努力を知っているだけに、彼女の変貌ぶりに驚き、賞賛した。

彼女の側近に就いてから2年の間に、ラッセルは徐々に自分の中に芽生えるモノに気づき始めた。

初めはなんて大きな器の少女かと驚いた。

護衛しているうちに、彼女の豪快で無邪気な性格に驚いた。

次第に賢く美しく成長していく彼女は仕える主でしかないが、自分の中では主従関係以上の何よりも大切な存在になっている。

同じく側近のエドは、そんなラッセルの様子に気づいて何度も「ロリコン」と言ってるからかう。

ラッセルとエドは20歳なのでルイーズとは8つ差だ。

エドは、主であるルイーズと側近のラッセルとではかなわぬ恋である事は承知の上で、「冗談半分にかかってるのだ。

ラッセルもちろんエドのそんな思いを知っているので、「ロリコン」と言われるたびに「俺は熟女好みだ」と冗談めかして返すのだ。

「サーーッシュ!!!聞いて聞いて!!!」

王子宮の中を駆け抜けながら、廊下で発見したサツシュにルイーズは声をかけた。

「何事だ!?!」

全速力で駆けて飛び込んできた彼女を両腕で抱きとめながら、サツシュは驚いた顔で彼女の顔を覗き込んだ。

「あのね、カトレアがね! けっっ・結婚するんだって!!!」

「・・・相手はエドだな?」

「えええっ!! サツシュ、知ってたの!?!」

「ああ、エドが今朝報告に来た。

二人がそこまで進展していたなんて気づかなかったな。

ルイーズは知ってたのか?」

「ううん! ぜんっぜん知らなかったの!

カトレアっては何にも言ってくれないんだもの。

私も今朝聞いたのよ! もうビックリしちゃって・・・」

サツシユは腕の中で頬を染めながら肩で息をしている彼女の頭をなで、自分の胸の中に包み込んだ。

「盛大に祝福してやるうな。」

「うんっ！」

サツシユの広い胸の中に顔をうずめて幸せな気分になりながら、ルイズはカトレアとエドの幸せを願った。

自室に戻ったルイズは、その部屋の主の衣服を整えるカトレアを見つめ駆け寄った。

「ねえねえ、カトレア。聞いてもいい？」

「はい？なんなりと。」

「結婚つて、どんな感じ？」

「どんな感じ・・・ずいぶんと漠然とした質問ですね・・・。」

“結婚”の言葉にパツと頬を染めながら、カトレアは考えた。

「そうですね・・・私はエドを愛しています。」

愛する人と一生一緒にいようと誓いを立てられるというのは、とても幸せな事です。

相手も私と同じ気持ちでいてくれる、それはとても奇跡的な事なのです。」

愛する、という気持ちをまだ知らないルイズには、それがどんな奇跡なのかいまいちわからなかったが、幸せだと語るカトレアの表情は、見ているこちらがウツトリしてしまうほどに輝いて見える。

「ルイズ様もいつか、そのように思える殿方に出会えますよ。」

いえ、おそらくもう出会っているとは思いますが・・・

目覚めるのはそう遠くないと思います。」

そう言つてカトレアはフツツと優しく微笑んだ。

「もう出会つてるの？ううーん？」

意味深なカトレアの表情の理由を首をかしげて考えてみた。

頭に浮かぶのはサツシユだった。

彼といると心が落ち着くし、とても安心する。

これから先ずつと一緒にいられるならとても嬉しいだろうな、とも思う。

でも“愛してる”とは何か違うような・・・

うなりながら考え込んでいるルイーズを見て、カトレアはニツコリと笑つて肩を撫でた。

「ルイーズ様。気持ちなんてものは考えてわかるものではないですよ。」

感じる物ですから、その時がくればきっとわかります。」

「うん、わかつた・・・」

じゃあその時を楽しみに待つてるわ！」

エヘへと笑うルイーズの表情は10歳の頃の彼女の表情と変わらない。

巷で才色兼備のお姫様などと謳われようとも、彼女はまだ12歳の子供だ。

彼女と恋の話をするのはいつになるかなと、ワクワクしながら微笑んだ。

2、明と暗

王宮から王子宮へと続くうっそうとした森の中を、サツシュとシヨウ、レイは歩いていった。

だいぶ前から何度も申請していたが断られ続けていた国王陛下への接見を、今日突然許可されたので行って帰ってくるころだった。

3人は言葉もなく暗い表情で歩き続けた。

国王陛下の様子があまりにも異様だったからだ。

サツシュがこの国に戻ってきてすぐに会った時にもおかしかったが、今回はあの時とは比べ物にならないほどだ。

土気色の顔には水気がなくミイラのようにゲツソリとしていて、閉まる事なく常に開いたままの口からは涎が流れ落ちている。

グツタリとイスにもたれ掛ったまま指先すら動く気配はない。

もちろん問いかけても返答は無く、かわりに傍に立つ王妃が無愛想に答えるばかりだった。

「シヨウ、王宮に潜入して調査してくれないか？

父上に何が起こっているのか。

特に王妃の周囲は気をつけて探ってくれ。」

「かしこまりました。」

そう言い残すとシヨウは一人王城へと気配を殺して向かっていった。

カトレアとエドの婚約報告から数日後、カトレアは荷物をまとめ、エドの部屋へと引越した。

「まだ結婚前ですから」

とカトレアは遠慮して断っていたが、サツシュが強引に二人の同棲

を押し進めた。

「愛し合う二人は早く一緒になりたいだろう？」

拳式まではまだ準備がかかるが、それまで二人で仲良くするんだぞ。」

ルイーズは毎日の日課になっている都の民の学校へと向かっていた。隣にはお世話係のカトレアが並んで歩き、少し後ろにはラッセルが護衛に就いている。

「カトレア、どう？同棲生活は？」

「ええ、仲良くやっていますよ。」

とはいえまだ引越してからほんの2日ですから、部屋の荷物がまだ落ち着いていません。

幸せな新婚生活にはまだまだかかりそうですよ。」

ほんのり頬を染めながらカトレアはほほ笑んだ。

「なんだか幸せそーだね！愛し合うって幸せなんだねえ・・・」

好きな人が自分を好きだという奇跡かぁ・・・」

数日前にカトレアが話してくれた恋の話は、ルイーズの心の中で何度も繰り返されていた。

そんな女の子二人の会話が聞こえてしまう距離にいるラッセルは、顔を真っ赤にしながら後ろをついて歩いた。

女の子に免疫のないラッセルは、「愛」なんて単語を聞いただけでも心の中に大事にしまっているルイーズへの思いが溢れてしまって、表情にしっかりと現れていた。

ラッセルの様子を見ながら、カトレアは少し釘を刺した。

「ルイーズ様、これから先もし恋する相手を見つけたなら、躊躇してはいけませんよ。」

相手に自分の気持ちを伝えなければ、何事も始まりませんし、終わる事も出来ませんから。

まあ、ルイーズ様でしたら何事も臆さず進むご性分ですから、心

配ないとは思いますが。」

カトレアは、ふふつと含みのある笑いをラッセルに向けて投げかけた。

ルイズはなんでラッセルに向かって笑ったのかさっぱりわかっていなかったが、ラッセルの今にも火を噴きそうなほど真っ赤な顔を見てかなり驚いた。

・・・くそうエドめ・・・カトレア殿に話したな・・・

実際にはエドは彼女に話していない。

純情なラッセルの態度は側近なら誰でもが気付くほどにわかりやすかった。

サツシユが執務室で書類の山に目を通していると、シヨウがドアをノックして入ってきた。

「例の件を調査してまいりました。」

「どうだった？」

「王妃は黒でした。」

国王陛下に強い毒性の麻薬を盛っています。

それで国王陛下の意識を失わせ、動けなくして自分の意のままに政治を動かしていたようです。」

ただの体調不良にしては国王の様子は異様だったが、まさか国王に麻薬を盛るなどと、王妃がしようとはサツシユはそこまで考えが至らなかった。

「なんてことだ・・・」

「さらに悪い知らせがございます・・・。」

表情を曇らせるシヨウの様子にサツシユはただならぬ不安を抱いた。

「まことに申し上げにくいのですが・・・

「……国王陛下のお命は、もう残り僅かかと……」
「……な……父上が……!?」

ガタンッ!

イスを倒して勢いよく立ちあがったサツシユは、沈痛な面持ちで再び口を開いたシヨウを見つめた。

「薬漬けにされたお体はもう限界の様子でした。」

公にはされていませんが、現在は意識がございません。

国王陛下は王宮の一室に閉じ込められ、王宮付きの医師を一名のみ傍に置いて看病されておりました。

医師と王妃の会話から、国王陛下の余命はあと3日ほどの事でした。」

サツシユは力なくイスに腰を落とした。

「まさか、そんな……3日だと……」

父上を……救う方法は、無いのか?」

「……ございませぬ……」

サラリとした金髪を両手でかかえ、サツシユはその手を強く握った。

「今から王城へ行く!父上が亡くなる前に話したい事は山ほどある!!!」

このまま人知れず亡きものになどさせてたまるか!!!」

語尾を荒げて部屋から出て行こうとするサツシユの目の前に、シヨウは飛び出し跪いた。

「お待ちください殿下!」

王城へ言っても国王陛下には会わせてもらえませぬ!!!」

サツシユが立ち止り話を聞く様子を見せたので、シヨウは話し続けた。

「王妃は国王陛下への面会を決して取り次ぎません。」

あのような状態の陛下を見られて、勘ぐられ、麻薬の事がバレてしまつては王妃は処刑されますから。

そしていくら殿下といえども王城へは許可なく進入できません。

確かな証拠をつかまなくては、王妃を断罪する事も陛下にお会いする事も出来ないのです。」

「では!どうしろというのだ!!

私はまたしても父上を救えぬではないか・・・!」

母である前王妃の死後荒んだ父王を救えなかった事に、サツシユは深く心を痛めている。

幼く力の無かった自分、逃げた自分にはもう戻りたくない。

「私が、証拠を掴んでまいります!

必ずや証拠を手にして戻ってまいりますから、殿下はここで、お待ちください!」

「シヨウ・・・」

サツシユは床に膝を付き、シヨウの手を両手で握ると、目を閉じて祈った。

「頼む・・・シヨウ・・・!」

2、明と暗（後書き）

前回の投稿からだいぶ間が空いてしまい、まことに申し訳ありません。

待っていて下さった方には心よりお礼申し上げます。

非常にマイペースではありますが、これからも宜しくお願い致します。

3、祈り

シヨウの報告を受けたサツシユは「待て」と言われても黙っていてもいられず、王子宮の中をそわそわと歩きまわっていた。

「サツシユ？どうしたの？」

ふと誰かに呼び止められ振り向くと、すぐ後ろにルイーズが立っていた。

「ルイーズ・・・ちよつとな・・・落ち着かなくて。」

サツシユは心配かけまいと口の端を少し上げてみせるが、かえってぎこちなく不安そうな表情を作ってしまった。

「果樹園、行かない？」

ルイーズが誘うとサツシユは頷き歩きだした。

二人はよく果樹園のベンチに座って二人きりで話をする。

政策の事、目安箱の意見の事、国の事、民の様子・・・

「この国のために出来る事を」というルイーズの信念は今でも揺るぎなく、サツシユはその姿に勇気づけられ励まされる。

ルイーズにとつても、自分の思いを受け止めて実現するために力を尽くしてくれるサツシユは、勇ましく頼もしい。

二人の間では国のための会話ばかりが多く語られている。

それなのにサツシユは今、いつものベンチに座っても国の事など話す気にもなれず、口を開けば父の死への不安しか出ないような気がしていた。

ルイーズにそんな弱い自分を見せるのは恥ずかしかったので、サツシユはしばらく口を開こうとはしなかった。

「サツシユ、私たちここでたくさんのお話をしたよね。」

口を閉じうつむいたままのサツシユの横顔を見て、ルリーズは今までの事を思い出しながら話し始めた。

「私がこの城にきたばかりの頃は、都はとっても寂しい景色だった。でもサツシユが頑張ったおかげですーっごく豊かになってきたよ！ これまで国のために、たくさんのお事をしてきたじゃない？

あたしね、こんなに頑張ったサツシユにお礼がしたいの！

だから、ね？今不安に思ってる事、力になりたいんだ。」

サツシユが横に座っているルリーズの顔を見ると、彼女は真っ直ぐに自分の瞳を見つめていた。

いつでも素直で真っ直ぐで明るいその瞳の前で、サツシユは何も恥じる事などないんだ、と素直な気持ちになった。

「実はな、俺の父である国王が、危篤なんだ。」

ルリーズはパツと口に手を当て、小さく声を出した。

「そんな・・・！」

「あと3日の命らしい。」

王妃がな、父を麻薬漬けにしていたんだ。

自分の意思で動けなくなった父に代わって、

王妃は自分の思いのままに国を操っていたらしい。」

「なんつ・・・てヒドイの！！」

信じられない・・・」

驚愕の表情でルリーズは赤い瞳を見開いた。

「王城には許可なく入るわけにいかない。」

父が危篤だなんてのは公にされてない。シヨウが潜入したからわかったことだからな、

だからまともに正面から行っても父には会わせてもらえないんだ。

だから俺はこうして、シヨウが証拠を掴んで帰ってくる事を祈っ

て待つしかないわけだ・・・。」

「そうだったの・・・」

ルリーズはいたわるようにサツシユの両手を自分の手で包み込んだ。

「あたし、一緒に祈る。国王陛下に会えるように！」
「ああ・・・頼むよ」

ルイーズはサツシユの手を包んだまま彼の肩に頭を預けた。
瞳を閉じて、どうか国王が生きている間に証拠が見つかるように、
そしてサツシユが国王に会えますように、と祈った。
ルイーズの頭の重みを肩に感じながら、サツシユは彼女の手と頭から徐々に体中に温かさが伝わり、心まで温かくなっていく感じがした。

シヨウが王城から証拠を持って帰ってくるよりも早く、その知らせはやってきた。

「で、でっ、殿下!!!」

国王陛下がご逝去されました!!!」

シヨウの報告から2日後の朝だった。

「くそっ!!!間に合わなかったか!!!」

レイ、すぐに王城へ行くぞ!!!」

父の死を聞かされても、覚悟が出来ていたからか思ったほど落ち込みはしなかった。

むしろこの後どうしたらいいのか、冷静に考える余裕すらあった。
あの日果樹園でルイーズに話してから、不安は和らいでいた。

王城ではすでに葬儀の準備が進められていた。

王子であるサツシユに訃報が伝えられたのは、国王の逝去からだい

ぶ時間が経ってからだつたらしい。

許可を得て王城に入ると、国王の棺の前で王妃カロリーナと元老院の議員達が整列していた。

カロリーナの足元には彼女の息子で3歳になったばかりのカインが手を繋いで立っている。

ザワザワとささやき声が響く中、サツシユは王妃の前へと足を進めた。

「王妃陛下」

「おや・・・サツシユ殿下。」

国王陛下がご逝去されたというのに随分と遅いお出ましで。

冷たいご子息を持たれて国王陛下は神の国で涙を流しておられるでしょうな。」

「冷たいのはどちらでしょうね。」

私の元へ訃報が届いたのは、ほんの数分前でしたよ。

そんな事よりも父上の死因はなんだったのですか、義母上？」

「突然の事でしたのでな。過労であろうと医師が申しておる。」

「過労、ですか・・・」

サツシユが目を細めてカロリーナをにらみつけると、彼女はギクリとして視線を自分を睨む青い瞳の上で止めた。

バれているとは思っていなかったカロリーナは、サツシユが何かを疑っていることに初めて気づいた。

サツシユの疑いの視線から逃げるようにして、カロリーナはパンパン！と大きく手を打ち、自分に注目を集めさせた。

「皆のもの！国王陛下がご逝去された！

早々に次期国王を決めねばならぬ！」

突然目の前で演説を始めた事に驚きもせず、サツシユは予想通りの展開を大人しく見守った。

「現在第1王子のサツシユ殿下は、王位継承者でありながら家出し、

5年間も城を開けておられた。

さらには国王陛下の訃報に早々に駆け付けるでもなく、このよう
なふてぶてしいご登場……

このような冷徹で怠慢な殿下に国を任せるわけにはまいりませぬ！
そこで第2王子の我が息子カイン殿下を次期国王に！よろしいか
！」

かなり強引な王妃の演説に元老院の議員達は言葉を失った。

しかしこれまで王妃がすべての政治決定権を握ってきていたので、
これに反論出来る議員は居なかった。

「王妃陛下、そのような大事な事項は議会を通して決定していただ
かなくては。」

カイン殿下はまだ幼く、国王任命となりますと文官武官の任命な
どもございます。

この場では決定しがたく……。「」

元老院の議員の中でも古株の勇氣ある者が発言した。

「ふむ。まあ、よいであろう……では早々に議会を招集せよ。」

4、冥福を

国王の葬儀は国中の貴族が集まり盛大に行われた。

王妃カロリーナは涙を流すこともなく淡々と葬儀の流れを見つめるだけだった。

ただの操り人形にすぎなかった国王に対して、当然だが愛は無い。息子の生まれた今となっては、息子を王に据えるために国王はすでに邪魔者でしかなかった。

そしてまだ幼い息子を国王にすることによって、これまで通り自分の思いのままに国を操れるからだ。

葬儀の最中も、頭の中は息子を国王にしたあとの今後の算段で埋め尽くされていた。

その横では第一王子サッシュが眉間にしわを寄せたり、暗く瞳を濁したりと、

一人で様々な思いにふけていた。

家出から戻ってからの約2年、王子として国のために出来ることを探し、努力してきた。

みるみる都は活気付き、自分の政策が実るのが楽しかったしやりがいを感じていた。

そんな中で我が父はどんな仕打ちを受けていたか……。

早く気づいていれば、止められたかもしれない。母を亡くしたあとの父を救えずに逃げ、そして今度は亡くなるまで助けられなかった。

次々に後悔と自責の念が押し寄せてきた。

悔しい……悔しい……！

サツシユはふと、自分の握り締めた右こぶしが暖かいものに包まれていることに気づいた。

「・・・ルーズ？」

右手を握りしめたまま自分を見つめていた彼女の紅い瞳からは、涙があふれ流れ続けていた。

「サツシユ、我慢することないよ・・・」

だって、お父様が亡くなったんだもの！悲しいに決まってる・・・！

彼女はもしかしたら、自分の親の亡くなった瞬間を思い出して泣いていたのかもしれないと、サツシユは思った。

彼女の涙を見ていると、自分の頬にも暖かい涙が流れ落ちるのを感じた。

そしてそのまま、暖かいものが心にも流れ込んできて全身が包み込まれるのを感じた。

ついさっきまで自分の中で渦巻いていた後悔と自責の念は、暖かい涙に押し流され

今はただ、純粹に亡き父の冥福を祈る気持ちに満たされていた。

元老院の緊急集会はそれから1週間後に開かれることと決まった。それまでの数日、サツシユは王子宮の中で過ごした。

外に出ると民はみな次期国王についてサツシユに詰め寄るばかりだったので、正直外には出たくなかった。

王子宮の中に居たとしても、次期国王の話題は尽きなかったが・・・。

コンコンッ

ドアをノックする音にルイーズは明るく答えると、読んでいた本から顔を上げた。

「ルイーズ様、おやつに大好物のタルトをお持ちしました。」
「ありがとうございますカトレア！」

机の上に置かれたタルトをフォークで突きながら、ルイーズは話はじめた。

「ねえ、カトレア。サツシユは今どこにいるかわかる？」

「先ほど厨房にいらして料理長とお話されましたよ。」

今は、お部屋に戻られたかと思えます。」

「そう……。なんだか、元気ないから心配で……。」

もちろん、お父様が亡くなられたのだから当然なだけだ。

少しでも元気になって欲しくて……。なにか出来ることはないかなあ。」

「ルイーズ様、最近は何も口を開けばサツシユ殿下の事ばかりですわね。」

フツツと笑いながらカトレアは何かの思いにふける少女を見つめた。

「なんかね、いつもサツシユの事を考えてる気がするんだ。」

いつごろからかな……。カトレアとエドの婚約発表の頃からかな？
いま何してるかな、とか。

国王陛下が危篤になられてからは、本当にサツシユの事が心配でたまらなくて、

悲しみに暮れてるサツシユの顔を見るともう自分の事のように心が痛い。」

タルトを突きながら思いを打ち明けるその少女は、
いつも思うだか才色兼備の姫様とはどうもギャップがある。
それがまたカトレアの母性本能をくすぐるポイントだ。

お使えする主ではあるが、妹のように可愛くも思っていた。

「ルリーズ様？」

あまりの可愛さに堪えきれなくなったカトレアは頬を染めながらそ
つと、ルリーズに語りかけた。

「それは恋というものですよ。お気づきでしたか？」

「えっ、こっつ・・・！こいい！？？」

一瞬で真っ赤に染まった頬を手で隠しながら、ルリーズはソファア
の背もたれに寄りかかった。

「それって、私が、サツシユを、好き・・・てこと・・・はあ・・・

」

深く深呼吸してからルリーズは立ち上がった。

「ちょっとサツシユのとこ行ってくるね！」

「はい、いってらっしゃいませ」

カトレアはニッコリと笑って可愛い妹を送り出した。

4、冥福を（後書き）

前回の投稿からなんと半年以上も経ってしまいました。

私生活がひと段落したので、また投稿できたらと思います。

お気に入り登録してしてくれた方々がいなければ

また書こうとは思わなかったかもしれないです。

登録してくれている方、読んでくれるすべての皆様に感謝しております。

まだまだマイペースな投稿かもしれませんが、今後もどうぞ応援を
よろしくお願いいたします！

5、胸に秘めて

広い王子宮の中を最深部まで進んでいくと、その突き当りにはひときわ大きな扉があった。

その扉をルイズがコンコンツとノックすると、中から「どうぞ」と声がした。

「サツシュ、今忙しい？」

「ルイズ、どうした。」

今この書類に目を通せば手が空くからちょっと座って待ってる。」

輝く金髪をサラリと揺らしながら、サツシュは机の上の書類を次々にめくっている。

ルイズが10歳の頃に初めて出会った時と比べると、身長が伸び大人の顔つきのように感じる。

さつきカトレアに恋だなどと言われたせいで、どうやらサツシュから目が離せなくなってしまったルイズは、ソファアに腰掛けたあとしばらく彼を見つめたまま物思いにふけた。

サツシュを好きなのは、自分でもわかってる。

だってあの村で私を救ってくれてから今まで、ずっと私を守ってくれてる。

彼は私にとって一番の理解者で一番近く存在。

だからこそ、この国のために頑張る彼の力になりたいし、ずっと一緒に居たいと思ってる。

でも、これは恋なの？

よくわからないわ・・・

・・・

「さて、と！終わったぞルイー……ズ？
寝ちゃったのか……？」

ソファーに腰掛けたまま、首をガックリと傾けてルイーズは眠っていた。
ふと窓の外を見ると、もうすっかり日が落ちていたことに気が付いた。

毛布を持ってきてルイーズの足元にかけてやり、そのまま隣に腰掛けた。
座ったままじゃ疲れるだろうと、彼女の体をそつと横に倒して、そして自分の膝に乗せてやった。

「ん……」
起きたかと思ったがまだ寝息は規則的に続いていたので、サツシユは安心して、膝にルイーズを乗せたままソファーに寄りかかり体を休めた。

才色兼備のお姫様、か？
巷で噂になっているのは聞いてるが、こうしてみるとただの子供だな。

赤い髪は軽くウェーブがかかっている。

10歳の頃から比べるとだいぶ伸び、今では後ろにひとつに束ねている。

身長もかなり伸び、12歳にしては長身だ。

この城に来た頃は真っ黒に日焼けして、ドロだか肌の色だかわからないような子供だったのに、今ではちゃんと女の子に見える。

サツシユは城に連れてきたときのナタリー達の反応を思い出し、つ

い笑ってしまった。

「クククツ・・・」

ビクツツ！

「あ、ルリーズすまん起こしたか」

「ううん、こつちこそごめんね、寝ちゃって・・・」

ルリーズはサツシユの膝の上に頭を乗せていたことに驚き、パツと起き上がった。

「サツシユ今、私の寝顔見て笑ってたの〜？」

少し口をとがらせながら、寝てしまっていた恥ずかしさから顔を背ける。

「いや、違うよ。」

「可愛い寝顔だったよ、お姫さま」

「もう！からかわないですよ〜！」

肩をパシツと叩きながら二人は顔を見合わせ笑った。

「何か用事があったのか？待たせて悪かったな。」

「あ、ううん、大した用事じゃないんだけど。」

「疲れてるみたいだったから、大丈夫かなと思って。」

「そうだな・・・。元老院の集会は明日だからな。」

「それまでに資料を集めて対策を練っておきたかったんだ。」

「サツシユは机の上の資料を顎で指しながら、フウツと息を吐いた。」

「対策・・・サツシユは第一王子としてよくやっているとと思うわ。」

「王妃はそれを無視できるかしら・・・？」

「対策、と言っただけで何のための対策なのか把握できるほど国の現状を知っていてくれるのは、サツシユにとってありがたいかった。」

都の民はサツシュが第一王子なのだから次期国王になるのは間違いないと思っている。

しかし国王の葬儀の直前に王妃が、自分の息子を国王する発言をしたことを知っているのは、元老院の者達のほか極わずかだった。現状では、何の対策もしなければ王妃は強引に幼い息子を国王に仕立てあげるだろう。

「実は、切り札があるんだ」

サツシュは青い瞳を細めるとニヤリと悪戯っ子のように笑った。

「明日を楽しみにしてるよ！きつとおまえも驚くよ！」

かなり気になるがサツシュはそれ以上の追求を許さずに、ルイーズを部屋から連れ出し夕飯の席へと引っ張っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4111j/>

焰の紋章

2010年11月13日12時33分発行